

研究の窓

社会保障研究所創立30周年にあたって

社会保障研究所創立30周年にあたり、この機関誌の巻頭言に寄稿するについては、感慨無量なものがある。とくに特殊法人改革に当研究所もとりあげられている折から、一段と複雑な思いにかりたてられている。

かつて、土光氏の第二臨調（第二次臨時行政調査会）に呼ばれて、社会保障問題の研究の必要を陳述したことがある。ひと昔前の慈善や救済の時代とは違って、今日の社会保障は国民一般を対象とする範囲の広いものであること、しかし「揺り籠から墓場まで」とか、「どこでもいつでも診てもらえる医療」とかいう空念仏を唱えるのではなく、年金も医療も社会保険を中心に制度として研究されていること、などを申し述べたと記憶している。今回も宮澤所長が厚生省などの関係者に研究所の研究態勢を説明し、とくに学界との関係や国際的な同種機関との連携などを力説されたと聞いている。

ところで厄介なことに、研究が必要かどうかはいま直接の問題ではないらしい。それとは全く別な理由——私にはよく解らない理由——から、経営形態の変革が必要だというのが目下の問題のようである。先日、宮澤所長とも話し合ったが、われわれとしては現状維持を第一とし、やむをえず経営形態を変えらるゝとしても、せめて研究の低下することのないよう期待するほかないというのが目下の心情である。

ここで研究が低下するとかしないとかいうのはどういう意味か。その哲学的な意味は差し置くとして、ここでは思いつくままに三つほどの論点を指摘したい。

第一は審議会との関係について。年金・医療・福祉などそれぞれに審議会があり、緊急の制度改正について審議がなされ、決定が行われている。多くの場合これら審議会は利害関係者の集まりであり、審議の結果を合意に導くには、一時的な妥協によるのが普通である。年金給付の開始年齢にまつわる既存の意見対立に応じて妥協的に調整をはかるところから、年金財政に後遺症的な歪みが残ることになる。それには既存の利害対立を批判的に見る必要があり、そこに研究の出番がある。研究は既存の利害関係に囚われることを避けるという意味で中立的であるが、中間の立場をとるという意味ではない。もしいわゆる官僚主義が支配的な世論に偏する傾きがあれば、研究はそれとも争わなければならない、むしろ隠れた弱い世論を掘り起こすことに努めなければならない。

第二に統計編集との関係について。社会保障関係の統計編集には情報網の確保が必要であり、それには官庁が行うのが便利である。ところで社会保障に関するかぎり、いまのところ三つに分散され、多少のバラツキがある。総理府の社会保障制度審議会事務局の年報、経済企画庁の国民所得統計、本研究所のILO基準の社会保障費の三つである。研究としてはそれら諸統計の比較と関連づけが求められ、定義の差による場合の修正も必要である。とくに企業福利の取り扱い是十分吟味されていない。情報網を持たない場合、研究の役割は二次的に過ぎないが、それだけ情報

網に縛られた歪みを指摘することができるし、何よりもこのことは統計の利用者の立場からは不可欠な仕事である。

最後に苦情相談との関係について。直接の苦情相談は、年金ならば社会保険庁その他において、福祉ならば各自治体の福祉課において担当される。研究としては、むしろそれら苦情の出てくる背景の社会状況が問題になり、それには判例や税務についての紛争を研究する必要がある。それは経済学と社会学との接点の問題にほかならず、最近の企業による福祉事業への進出も同じ領域の重要な問題である。(1995.2.5 記)

山 田 雄 三

(やまだ・ゆうぞう 一橋大学名誉教授・社会保障研究所初代所長)

テーマ「21 世紀の社会保障の思考軸」

——サービス体系の変容と財源調達——

基調講演：21 世紀の社会保障の思考軸——「体制」変動の中の制度デザイン——

..... (社会保障研究所長) 宮澤 健一

シンポジウム

税制と社会保険システム

レポート：..... (一橋大学教授) 高山 憲之

コメント：..... (奈良女子大学助教授) 木村 陽子

社会保障における措置制度の再検討

レポート：..... (姫路独協大学教授) 小室 豊允

コメント：..... (法政大学教授) 大山 博

介護システムの構築とその方法

レポート：..... (慶応義塾大学教授) 清家 篤

コメント：..... (お茶の水女子大学教授) 篠塚 英子

討論(司 会) (社会保障研究所研究部長) 伏見 恵文

(まとめ) (社会保障研究所長) 宮澤 健一

挨拶

社会保障研究所長 宮澤 健一

本日は私どものシンポジウムに多数ご参会いただき、まことにありがとうございます。私ども社会保障研究所では、毎年シンポジウムを恒例的に開き、学界・実業界の皆様と交流の場をもってきましたが、今年はちょうど創立 30 周年を迎えますので、これを記念して企画を立てさせていただきました。ところが、私どもの予想をはるかに超えるご参加を得て、大変うれしきかぎりです。

ただし、会場を新たに別途もう 1 か所設営して画像と音声のサブ会場を設けるなど、大変ご不便とご迷惑をおかけすることになりました。このことを、まずお詫び申し上げます。

30 周年の記念でありますので、それにふさわしいテーマをということで、「21 世紀の社会保障の思考軸」というタイトルを設定いたしました。21 世紀を目前にしたこの激動の時代をまえにして、よく「再考」とか、「再検討」という言葉が多く使われますけれども、もっと踏み込んだ新しい言葉を、30 周年の節目に使いたい。そういうことから、「思考軸」という語を選びました。

社会保障に対する視点、考え方そのものを、基礎から見直す必要があるのではないかと。いってみれば、座標そのものの軸の検討が要請されているのではなかろうか。そういう問題提起的な意味を、この言葉に込めております。

ただしそうは申しまして、論点があまり抽象的になってはならない。できるだけ具体的なレベルの内容をそれに与えたい。そうしたところから、副題として、「サービス体系の変容と財源調達」を掲げました。福祉や社会保障サービスの体系が近